

「精神分析と哲学の悩ましい関係」パネルディスカッション

哲学はいかに精神分析を必要とするか？

野尻英一

(大阪大学大学院人間科学研究科・比較文明学研究室)

2021年3月13日 (日)

主催：東京精神分析サークル
哲学の実験オープンラボ (大阪大学未来共創センター)
早稲田大学大学院文学研究科表象・メディア論コース

哲学と精神分析の関係

- ❖ フロイト「精神分析」の系譜は、二〇世紀の哲学・思想に、マルクス、ニーチェとともに決定的な影響を与えた。
- ❖ 意識や理性を中心とした近代哲学のパラダイムに対して、無意識や非理性的なものの働きを人間理解の重要な要素とした。

ヘーゲルを参照軸に考えてみる

1. フロイトはヘーゲルに直接の影響を受けていない。
ディスシプリンとしての「哲学」とは距離があった人。
2. フロイト精神分析の方法を理論的／哲学的に洗練させたラカンは、しばしば「哲学」を批判し「精神分析」の意義を強調する。その一方で「弁証法」という言葉をよく使う。→人間精神の「力動性」を強調する。

「力動性」とは？

- ❖ 人間の「心」が変化するものであること。
- ❖ 単に発達的に変化するのではなく、相互作用により変化する事。
- ❖ その「変化」とは、自己の「幻想を横断する」こと。
幻想を横断するとは、自分の「自己」が幻想を織り込んだ構造体であることの触知によって、自分が変わる事。

ヘーゲルを参照軸に考えてみる

哲学と精神分析はどれだけ近いのか？

3. ヘーゲルに精神の力動的理解の端緒を見ることができるか。できるとしたらどのように？（課題①）
4. 今日の哲学は、精神の力動的理解をいかに必要とするか（課題②）。F・ジェイムソン、S・ジジエクの精神分析の拡大による文化論試み、オープンダイアログ、哲学対話、和解学の試み。

ヘーゲルの精神病理学

1. 『エンチクロペディー』の「精神哲学」における精神病理学的な叙述（記述的&力動的）
2. 『精神現象学』における精神の力動的な変容（転移的）

ヘーゲルの精神病理学

1. 『エンチクロペディー』の「精神哲学」における精神病理学的な叙述

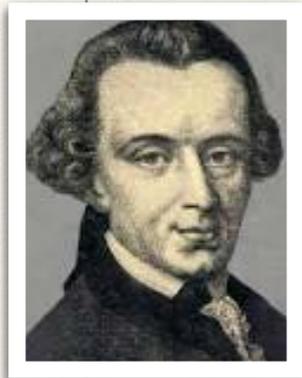
1700

フランス革命

(1789)

1800

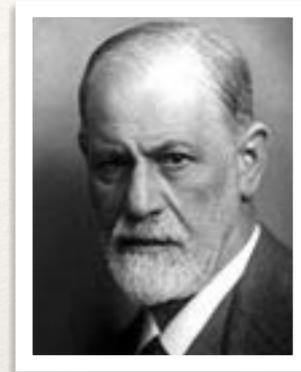
1900



カント
(1724-1804)

『人間学』
(1798-)

フロイト
(1856-1939)



閉鎖精神病棟の開放
(1793)

ピネル
(1745-1826)



ヘーゲル
(1770-1831)

『精神哲学』
(1817-30)

賞賛!

塔に入る (1806)

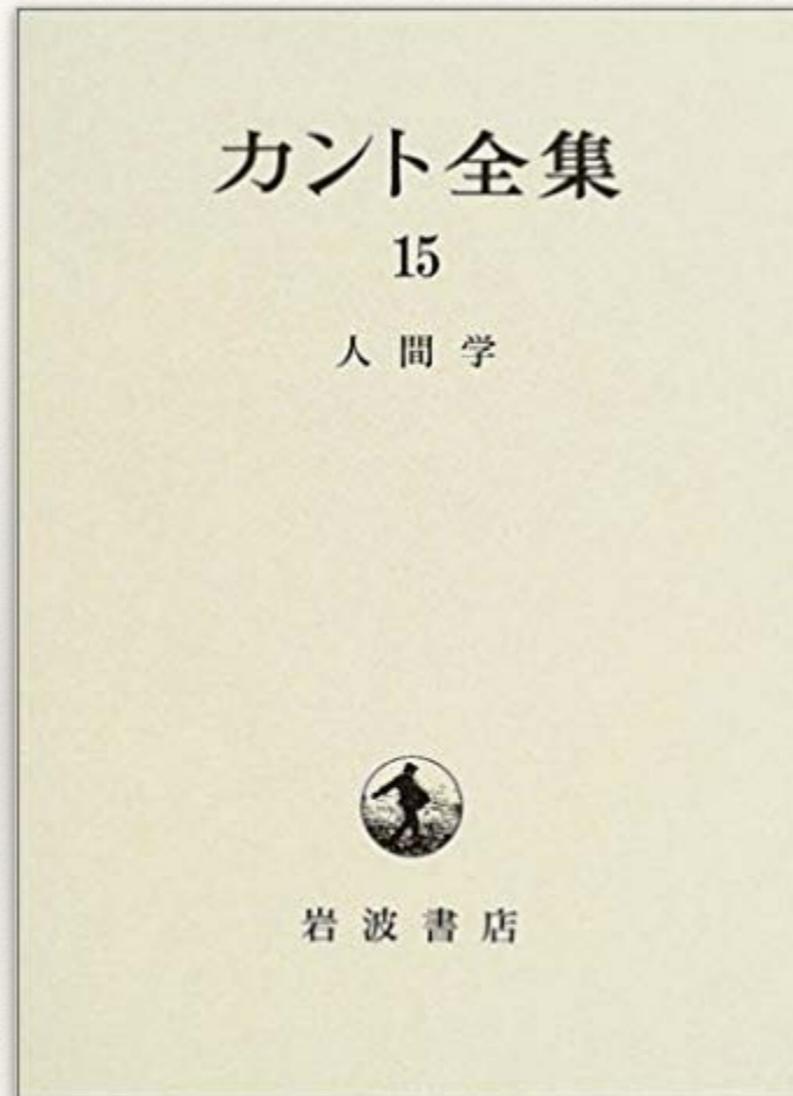
ヘルダーリン
(1773-1843)



シェリング
(1775-1854)

「**真実の心理的取り扱い**は、**精神錯乱**は、**知性の側面**からいっても、**意志と**
その帰責能力との側面からいっても、**理性の抽象的喪失**ではなく、**単に精**
神錯乱にすぎず、単になお現存している理性における矛盾にすぎないという
視点を固持している。そしてそれはちょうど、**肉体的病気が健康の抽象的す**
なわち全体的な喪失——そのような喪失は死であろう——ではなくて、健康
における矛盾であるのと同じことである。この人間的な取り扱い、すなわち
親切でもあり理性的でもある取り扱い【ピネルは彼がこの取り扱いのために
なした功績のために最も高く賞賛される資格がある。】は、患者を理性的な
ものとして前提する。そして人間的な扱いは、この前提のなかに、患者を
理性の側面から捉えることができるための確固とした支柱をもっている。そ
してそれはちょうど、患者を肉体性のほうからとらえようとするときには、
生命性がその支柱になるのと同じことである。生命性そのものはなお自己の
なかに健康を含んでいるのである。」（精神哲学、邦訳214-215頁）

カントの『人間学』（1798-）



カントの『人間学』（1798-）

第一篇 認識能力について

認識能力に関するかぎりでの魂の弱さと病について

C心の病について

雑注

「母体の胎児が成長していくのと同時に、精神異常の萌芽も成長していく。つまり精神異常もまた遺伝性のようだ。そうした人物がただ一例でも以前にいたという家系の人〔女性〕と婚姻関係を結ぶことは危険である。というのは一組の夫婦から生まれる子供たちでいえば、例えば全員がその父親に似るとか、父親の両親つまり父方の祖父母に似ることがあるから、この歓迎しない遺伝子を免れたものがたくさんいるということはあるにしても、しかしもし母親側の家系にたった一人でも精神異常の子供がいたという事実があるならば（たとえ彼女自身はこの災いを免れていようとも）、いつかはこの夫婦にも、母方の家系に属ししかも（姿形にはっきり現われるのと同じように）遺伝的に最初から心の狂気を持った子供が生まれてくるからである。

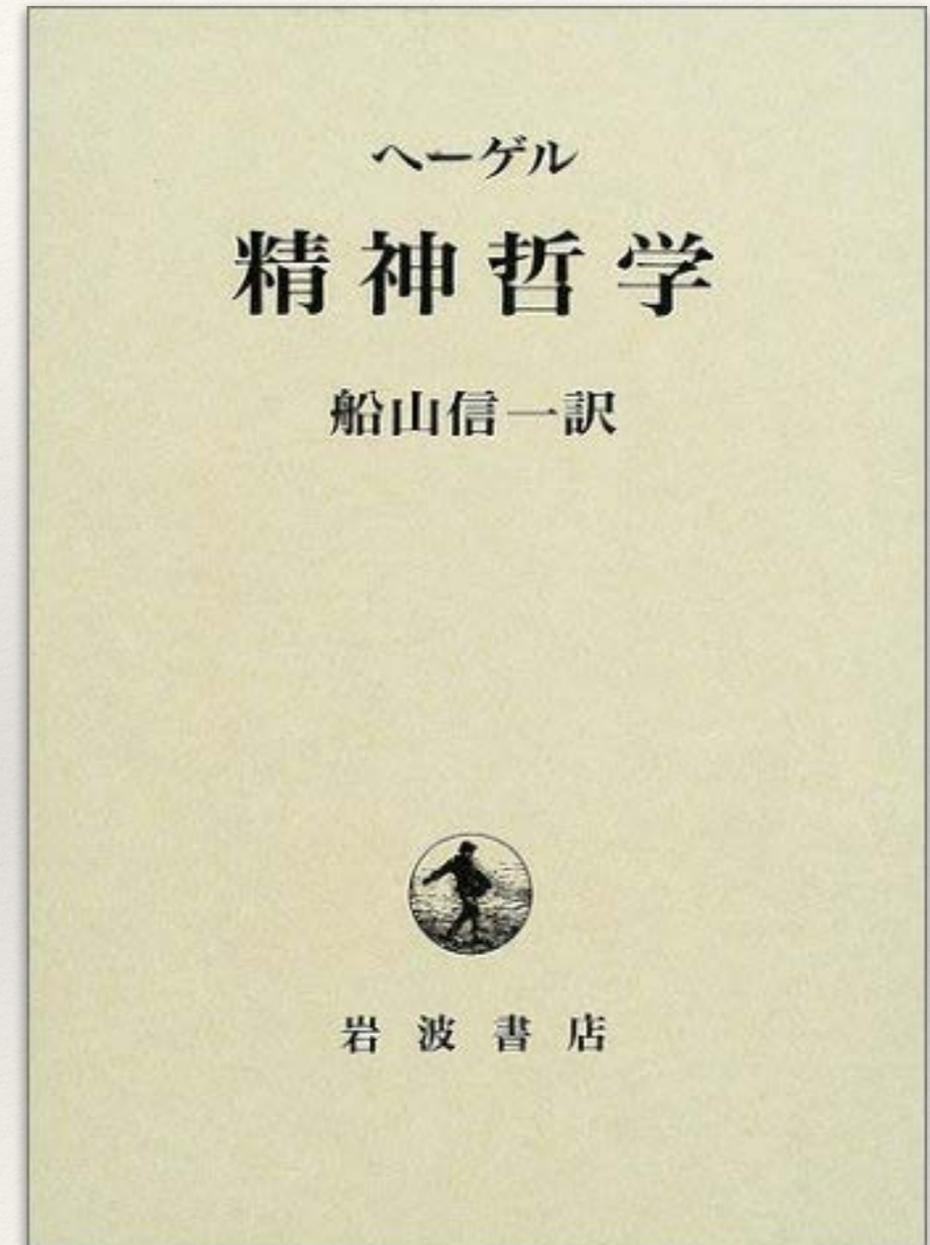
ときおりこうした病気には偶発的な要因を挙げることができると主張されるが、とするとこの病気の原因は遺伝的なものとしてでなく、まるで当の不幸な者自身に責任があるかのように、自分で招いたものとして受け取られるべきであることになる。〔がそんなことはありえない〕」（邦訳155-56頁, V136）

カントの『人間学』（1798-）

カントが生まれつきの自然的性質として考えていたもの

- ・ 精神病
- ・ 個人の性格
- ・ 男女の性格
- ・ 国民の性格
- ・ 人種の性格
- ・ 人類の性格

ヘーゲルの『精神哲学』
(『エンチクロペディー・第三卷』 (第三版)
(1830))



『哲学的諸学問百科全書綱要』

第一卷「論理学」

第二卷「自然哲学」

第三卷「精神哲学」

緒論

第一篇 主観的精神

A 人間学 心

a 自然的心

b 感ずる心

c 現実的心

B 精神の現象学 意識

a 意識そのもの

b 自己意識

c 理性

C 心理学 精神

a 理論的精神

b 実践的精神

c 自由な精神

第二編 客観的精神

第三篇 絶対的精神

カント

動物と同じように自然に近い状態で生きる人間の気質、感情、習慣性について。テーマは心の「覚醒」。「心」としての精神はまだ自然との一体性の中にたゆたっており、夢を見ている状態にあるが、そのような「心」のもとに「夢見」や「予感」や「守護神のお告げ」として届くものがじつは自分自身の本体から届くメッセージであると知ることが、心の「覚醒」である。

フッサール

習慣の形成という文化の力によって自然から抜け出し、文化的、社会的な存在として覚醒し始めた人間の精神状態、いわば近代的な意識の構造とその経験の叙述。主-客が分離した状態。認識する主体は、世界は私が認識するから世界だという境位に到達するが、やがてもう一つの意識との関係性に入り、闘争と承認の継起を経て「自己意識」となる。この過程を経たあとの人間意識は人間意識一般として世界に立ち向かう「理性」となる。

ラカン

「理性」が世界を人間の活動そのものと同一であると確信する境位、つまり精神にいたるプロセスの叙述。今日の言葉を使えば、社会的プロセスとしての象徴的去勢の過程の叙述。人間の精神が社会構造を生み出し、それが動的構造として自立することで、人間による人間のための人間の世界（記号の世界）が生み出される。幼児が成人に成長するとは記号の世界への参入である。構想力（想像界）の記号化（象徴的去勢）。成長とは「記憶」のうちに生きようになることである。人間の精神は、直接的な感覚によって世界を見ることから抜け出て、世界に機械的記憶を重ねて見るようになることで知的な心、つまり「精神」になる。

主観的精神

A 人間学 心

a 自然的心

b 感ずる心

c 現実的心

B 精神の現象学 意識

a 意識そのもの

b 自己意識

c 理性

C 心理学 精神

a 理論的精神

b 実践的精神

c 自由な精神

【夢見と予感と精神錯乱】

- 夢見（自然的夢見、母体のなかの子ども、守護神の神託）
- 予感（ダウジング、透視、幻視、テレパシー、遠隔共反応）
- 精神錯乱 Verrücktheit
→身体的記憶としての習慣、心の「記号」としての**身体表現の訓練**→**治癒。**

【構想力と記号】

- 感覚表象を抽象化し、想起の自然的な継起や連合を遮断し、構想力によって制御すること。
- 空想を「記号」と結びつけ、意味を充填した「記号」を機械的記憶として貯蔵すること。

→**知性の確立。**

主観的精神

A 人間学 心

a 自然的心

b 感ずる心

c 現実的心

B 精神の現象学 意識

a 意識そのもの

b 自己意識

c 理性

C 心理学 精神

a 理論的精神

b 実践的精神

c 自由な精神

身体的習慣の形成によって、超常現象と精神疾患が消える。精神が自己の本体を内部に取り戻すこと（Erinnerung）。身体の機械的記憶の形成。魔術的世界からひきこもり、自己の肉体に魔術をかけること。「守護霊」の声を聞かなくなる。内なる他者の声を自己の声として聞くようになること。

「想起」を「構想力」に高め、さらに「記憶」に変換すること。視覚的イメージを抽象化し、音声化、機械的な記憶の集合に接続すること。音声的構想力による時間の発生。一般的記号体系へのアクセス。他者の声に自己（たち）の声を重ねて自己化すること。他者の「痕跡」を自己（たち）の「記号」として読むこと。遺跡の声を聞くこと（ピラミッド）。

主観的精神

A 人間学 心

身体の規律／訓練

B 精神

a 意識そのもの

b 自己意識

c 理性

C 心理学 精神

構想力の規律／訓練

身体的習慣の形成によって、超常現象と精神疾患が消える。精神が自己の本体を内部に取り戻すこと（Erinnerung）。身体の機械的記憶の形成。魔術的世界からひきこもり、自己の肉体に魔術をかけること。「守護霊」の声を聞かなくなる。内なる他者の声を自己の声として聞くようになること。

「想起」を「構想力」に高め、さらに「記憶」に変換すること。視覚的イメージを抽象化し、音声化、機械的な記憶の集合に接続すること。音声的構想力による時間の発生。一般的記号体系へのアクセス。他者の声に自己（たち）の声を重ねて自己化すること。他者の「痕跡」を自己（たち）の「記号」として読むこと。遺跡の声を聞くこと（ピラミッド）。

**身体の規律／訓練
生命の政治学
(フーコー)**

近代性

**構想力の規律／訓練
記憶の政治学
(イアン・ハッキング)**

フーコー『カントの人間学』より

人間学的な考察の外縁に描かれた「精神」はカントの思考の構造にとって実は不可欠なものなのではないか、と問うことができるだろう。それは純粹理性の核心とでもいうべきなものかであって、超越論的錯覚の根絶不可能な起源であり、正統な故郷への回帰にあたって過つことのない判断を下す裁判官であり、真理の様々な相貌が次々に立ちあらわれてくる経験的な領野における運動の原理でもある。だとすれば、「精神」とは本源的な事実であるということになるのではないか。この本源的な事実の超越論的なヴァージョンによると、無限は決してそこにはなく、つねに本質的なしりぞきのなかにある。にもかかわらず、その経験的なヴァージョンにあっては、無限は真理に向かう運動と真理の諸形式のつきることのない継起に生氣を与える。『精神』は知の可能性の根幹にある。だからこそ、それは認識の諸形象に現前すると同時に不在なのであり、その現前と不在とはわかちがたい。「精神」とはこのしりぞきである。それは眼に見えないと同時に「眼に見える奥まり」である。〔Kant&Foucault (2008) . 邦訳七六一七七〕。

デリダ『哲学の余白』より (ヘーゲルについて)

ヘーゲル主義は形而上学の完成、その終結および達成を代表するとよく言われる。であればヘーゲル主義はそうした「弁証法的円環の生成としての形而上学的システムのもつ」拘束力に最も体系的でもっとも強力な形式を与え、まさにそのことによって自己自身の極限〔＝限界〕に導かれている、と予期されるはずである〔Derrida(1972) 83. 邦訳（上）一四二。〔内補填は野尻〕〕。

カント
(18C)

悟性

概念
(言葉)

理性／道徳

象徴界

意味

認識＝存在者＝道具的秩序

ヘーゲル
(19c)

神経症 = 定型発達

分裂と統一の統一

デリダ
(20c)

イメージする力
構想力 (想像力) (記憶)

鏡

想像界

人間的世界 (社会・歴史)

ラカン
(20c)

感性

物自体
(世界そのもの)

現実界

無意味

気分／忘却 ハイデガー
(20c)

統合失調症 ⇒ 自閉症

分裂と統一の非統一
存在

カント (18c) シェリング
(19c)

ドゥルーズ／
ガタリ
(20c)

非人間的世界 (自然)

ヘーゲルの精神病理学

2. 『精神現象学』における精神の力動的な変容

『精神現象学』とは？

- ❖ 「意識の経験の学」であり、それがすなわち「精神の現象学」である、とされる。
- ❖ 「意識」が「経験」するものは、自己の知らない自己に他ならない。
- ❖ 「意識」が自己の限界（臨界）にふれることで、変容／確信していくプロセス。

『精神現象学』

フロイトの
精神分析

「意識」が自己の**限界（臨
界）**にふれることで、**変容**
／**確信**していくプロセス

(いずれもほぼヘーゲルを読まなかった)
↓
(デリダはこの隔世遺伝的な継承関係を取り
出そうとしている。)

変容と確信（ヘーゲル）

フッサールの
現象学

差異と同一の同一（＝弁証法）

「意識」の**限界（臨界）**とは何か？ → 意識が背負う発
生論的／発達論的な「厚み」（身体、想像力、言語）

『精神現象学』とは？

- ❖ 読者はテキスト中の「意識」への転移を誘導され、変容を経験する。変容せずに読むことはできないテキスト（ジュディース・バトラー『欲望の主体』）。
- ❖ テキスト中の意識の「知」が否定性としての「真理」に触れることで「私念」としての構造を露わにする時、それとシンクロしている読む主体は変容を余儀なくされる。『精神現象学』は「読む精神分析装置」として構成されている。
- ❖ 「ヘーゲルは精神分析の偉大な先駆者なのである」（ジジエック『もっとも崇高なヒステリー者』）。

ジェイムソンとジジェクの理論

- ❖ ヘーゲルとラカンの融合
- ❖ 「歴史」の不可知性（誰も歴史について知の主人であることはできない）
- ❖ 「文化作品における象徴とは私たちが現実界の水準において経験している解決不可能な矛盾の想像的解決である。」
（ジェイムソン） → 幻想から構造／歴史への逆行が可能
- ❖ 「対象a」、「ファンタスム」の集合的事象への拡張

<対象a>について

「<対象a>は客観的には無である。だがそれは、ある角度から見ると「何か」の形をとってあらわれる。」

「.....幻想空間は中身の無い表面であり、いわば欲望が投射されるスクリーンである。そのポジティブな中身が魅惑的に眼前にあらわれることの意味は唯一つ、ある穴を埋めることである。.....男たちが「ブラック・ハウス」に近づくことを自分たちに自身に禁じていたのは、そこが、彼らが自分たちの郷愁にみちた欲望、すなわち歪曲された思い出を投射できる、からっぽの空間だったからである。」

(ジジエク 『斜めから見る』 35, 29-30頁[p.12, 9])

記憶の器としての〈私〉、歴史の器としての〈国家〉を超えて

—和解学のための詩学とマイクロポリティクスへ—

記憶の器としての〈私〉、歴史の器としての〈国家〉を超えて

—和解学のための詩学とマイクロポリティクスへ—

野尻英一

わたしの答えは、自分でもまったく思いがけないものでした。はい、と答えました。これまで、忘れることと記憶することの間で葛藤する個人を書いてきたが、これからは、国家や共同体がこの問題にどう向き合うかをテーマに書いていきたい、と。国家も、個人と同じように記憶したり忘れてしまうものなのか。それとも、そこには重要なちがいがいいのか。国家の記憶とは、いったいどんなものなのか。それはどこに保存されているのか。(イングロ 2018)

はじめに

この論考では、哲学的人間学あるいは哲学的心理学の観点から、記憶と歴史認識の問題を扱う方法の可能性を探り、同時にそうした研究から「和解学」の展望に資するものが得られるのかを考えていきたい。ここではおもに人文社会科学における領域横断的な思考が試され、西欧古典哲学の記憶論を再解釈することから精神病理学分野における最新の知見の導入、さらには現代の表象文化(文学、映画、漫画、アニメ)に見られる記憶についての問題構成(プロブレマティク)を解読することまでが試みられるだろう。

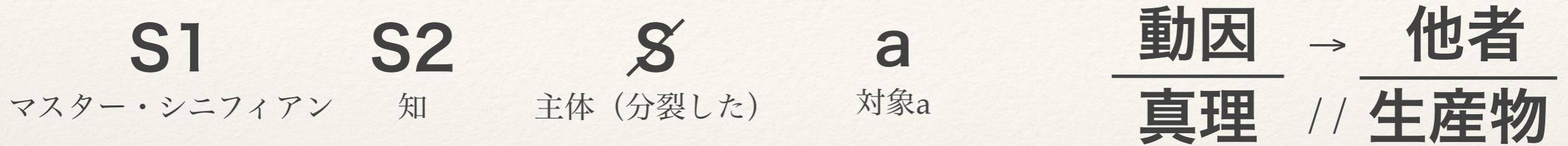
哲学的人間学／心理学による記憶論というタームで筆者が想定している系譜は、カント、ヘーゲルなど十八、十九世紀のドイツ観念論が展開した「人間学(Anthropologie)」に含まれていた構想力(想像力)と記憶についての理論、十九世紀後半から二十世紀初頭にかけてフロイトが取り組んだ症候と無意識的記憶についての精神分析、ベルクソンの哲学的記憶論、モーリス・アルヴァックスの集合的記憶論、さらに二〇世紀中盤以降にフランクフルト学派のホルクハイマー、アドルノ、ベンヤミンらが取り組んだ心理学(フロイト)と社会理論(マルクス)の融合としての批判理論が扱った大衆文化や商品空間における想像力、記憶、歴史の生成のメカニズム、アルチュセールが考えた表象と構造的因果性との関係、デリダが照らし出した空白の記憶としての西洋形而上学の問題、フレドリック・ジェイムソンが論じる現代社会における白昼夢と表象文化とユートピア性の関係、スラヴォイ・ジジェクがヘーゲルとラカンを駆使して論じる普通精神病もしくは「症候」としての政治と文化の問題、ポール・リクールが展開する記憶と歴史と忘却についての哲学、またそれらを二一世紀の視点から整理総括するアン・ホワイトヘッドの記憶の人文学へと続く流れである。ここではそのうち重要な里程碑と定めた思想を順にたどりつつ

記憶の器としての〈私〉、歴史の器としての〈国家〉を超えて

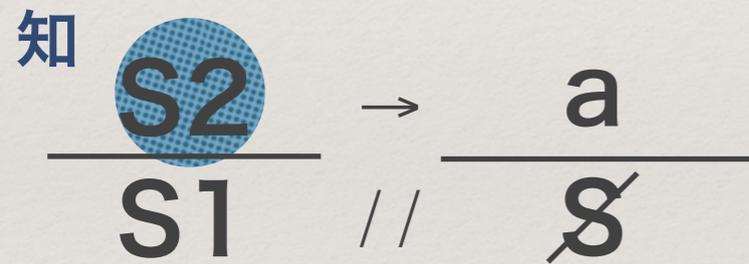
—和解学のための詩学とマイクロポリティクスへ—

- ❖ ヘーゲル／デリダの構想力論／記憶論／記号論
- ❖ アルヴァックスの集合的記憶論
- ❖ イアン・ハッキングの多重人格論（記憶のポリティクス批判）
- ❖ ジェイムソン／ジジェクの表象論＝ファンタズム論（対象aの集合化）
- ❖ 野尻の自閉症学（定型発達における対象a構造の集合的形成）
- ❖ マルクス＝野尻（1970年代以降のグローバリゼーション、1990年代以降のハイパーグローバリゼーション、戦後国民国家体制の終焉、「対象a構造」としての国家の相対的後景化）
- ❖ オープンダイアローグ、哲学対話、和解学の技法（ファンタズムを横断することとしてのの）

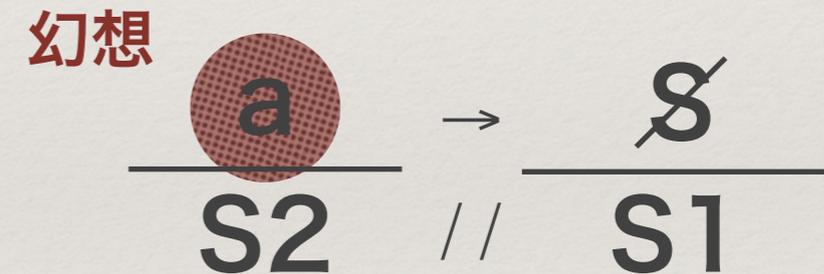
「大学のディスクール」から「分析家のディスクール」へ



大学のディスクール



分析家のディスクール



社会や歴史についての「真理」（を持っている権威の座）（S1）を支えに、「知識」（S2）を展開することによって他者（学生）の「対象a」（欲望の原因=対象）に対峙する（攻撃する）。「真理」から隔絶された分裂した主体が生産される。

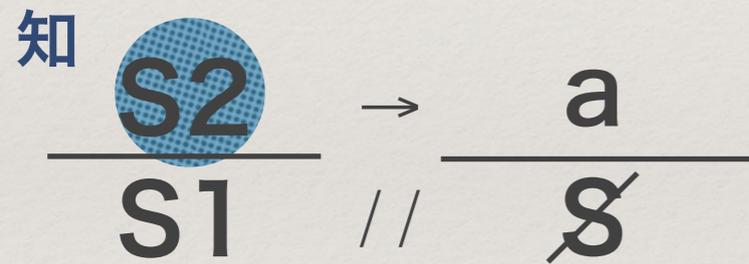
「知識」はあるが「知識」を前面に出さずに欲望の原因（対象a）を前面に出す。精神分析においては分析家が分析主体の「対象a」（欲望の原因=対象）であることをいったん引き受けることだが、大学においては対話による欲望の相互作用により個々の「対象a」が主体にとって可視化される場を作る。この集合的プロセスにより「主体」はマスター・シニフィアンを更新することができる。新たな社会的紐帯の形成。

和解のための技法

「大学のディスクール」から「分析家のディスクール」へ

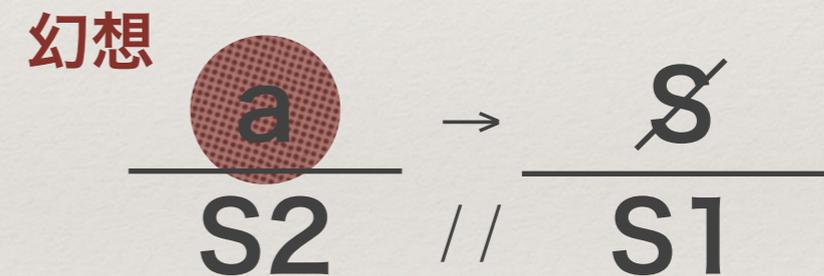
知ではなく、幻想の交換をこそ

国家間の歴史認識をめぐるポリティクス



歴史についての「真理」（を持っている権威の座）（S1）を支えに、「知識」（S2）を展開する。他者（他国民）の「対象a」（欲望の原因＝対象）への攻撃的対峙となる。

「和解」のための技法



「知識」を前面に出さずに欲望の原因（対象a）を前面に出す。精神分析においては分析家が分析主体の「対象a」（欲望の原因＝対象）であることをいったん引き受けることだが、国民間の和解においては対話による欲望の相互作用により個々の「対象a」が主体にとって可視化される場を作る。この集合的プロセスにより「主体」はマスター・シニフィアンを更新することができる。新たな社会的紐帯の形成。

記憶の器としての〈私〉、歴史の器としての〈国家〉を超えて

—和解学のための詩学とマイクロポリティクスへ—

オープンダイアログから得られた示唆は、「和解学」に何をもたらすだろうか。

おそらくそれは、政治や外交の現実的な技術とは別の水準の認識と実践を和解学は持たなければならないという和解学プロジェクトの出発点における前提に、もう一段深い理論的および実践的認識を差し戻したということにほかならない。その認識と実践を本論考では、オープンダイアログから借りた「詩学」と「マイクロポリティクス」という言葉によって、当面のところ表現することにしたわけである。国家レベルでの政策や外交交渉は、必然的に象徴界、すなわち「大文字の他者」の言葉による実践領域であるほかない。一方で、この一〇〇年間にわたって機能してきた象徴界の要としての国民国家の地位がゆらぎ、国家による現実界（経済）と想像界（想像力）の包摂が緩み、個人の想像力が漂流していることを、記憶とアイデンティティの問題の文明論的な様相として本論考では分析してきた。本来は接合しないはずの象徴界と現実界とを強力に接合すること、そのために想像界の作用を一つの再帰的再構成の回路にとじ込め、無を中心に抱えるモーターを形成し、変容しつつ同一であるという動態性の構造、すなわち無限に交換価値を増殖する経済様式として駆動させること。このいわゆる資本主義経済と呼ばれる構造からの脱却の途として、詩的言語の可能性はさまざまな論者によって指摘されてきた。たとえばラカンがジョイスの独自言語的な創作にみた可能性から、バフチンがドストエフスキーのダイアログの詩学に見た可能性、クリステヴァのセミオティックの革命性、梅森直之が石川啄木の詩作に見出した可能性までが挙げられる（梅森 2016）。これらは〈私〉という主体を析出する資本のマイクロポリティクスを、私たちのマイクロポリティクスとして反転させる可能性の模索であった。

記憶の器としての〈私〉、歴史の器としての〈国家〉を超えて

—和解学のための詩学とマイクロポリティクスへ—

国民国家構造の経済的な有効性が強い時代ほど、詩的言語は狂気と紙一重の天才的な資質による類い稀な宝石として生み出されるほかなかったであろう。だがそうした病跡学的な天才論は、和解学とはまだ距離がある。ハルトゥーニアンは、一九五〇年代日本の労働者サークルによる詩作行為をオルターナティヴな時間性を開く活動であったと評価する（Web記事5）。ハルトゥーニアンの指摘は、複数の時間性や対話／ポリフォニーの要素に資本主義超克の可能性を見出している点が注目に値するが、これも一元的な国家の時間性に抵抗する拠点を求める問題構成であり、和解学の問題構成とはまだ距離がある。和解学というプロブレマティークが二一世紀の現代において描こうとしている問題とは、国家への接合から切り離され、むき出しになった詩的言語の行方である。詩的言語によって国家を内破する戦略を構想する時期は去った。むしろ詩的言語が、国家との対で詩的言語であることから脱却する時期となっている。和解が問題となるとき、すでに対話は始まっていると見るべきだろう。つまり「場」の構成はすでになされつつある。

「場」の構成は、ハイパーグローバル化の影響下に同時的に巻き込まれた始めた各国の諸主体が交叉しながら生み出し消費する表象文化現象から、遡行的に認識することができる。近年、記憶についてのプロブレマティークを含む表象文化作品が多いのは、決して偶然ではなく、構造的な理由がある。その論拠を本論考は示してきた。

記憶の器としての〈私〉、歴史の器としての〈国家〉を超えて

—和解学のための詩学とマイクロポリティクスへ—

和解は「行為」としての対話によって実現されるだろう。しかしその対話とは理性的な対話ではない。妄想が表出されることによって開かれるダイアローグでなければならない。和解とは理性的な交渉によってやがて到達される地点のようなものではない。それは理性的な言語、つまり象徴界の機能によって到達されようとすれば、無限に遠のくものである。これが本論考の示した知見である。政治はどこまでも理性的な言語で行なわれるほかないだろう。象徴界（政治）による抑圧があるからこそ、現実界（経済）の進展に対応した想像界（妄想）の機能の高まりがある。ダイアローグの場はそこに開かれる。こうした意味で和解とは、政治とは別の水準にその場を見出し、政治と並行して展開されるものである。

当事者とは誰のことか

- ❖ 「いまここ」にいる者たち、対象a構造によるファンタズムを抱える者たち。
- ❖ ただし「対象a構造によるファンタズム」は資本主義経済（CE）を駆動する燃料を供給しており、CEは地球全体を巻き込んでいるので、この構造に参加しない者たちも、巻き込まれるかたちで当事者となっている。→**グローバルな分析状況の出現。**

記憶の器としての〈私〉、歴史の器としての〈国家〉を超えて

—和解学のための詩学とマイクロポリティクスへ—

特にBL／やおい文化については、そもそものはじめから二次創作（既存の商業作品を改編して楽しむこと）とファンダムにおける交換の欲望によって生じたジャンルであることが注目に値する。……この欲望の表出が、東アジア圏を巻き込んでいる。それを「下からの文化的グローバリゼーション」や「グローバルな対抗的公共圏」ととらえる論考も出ている（ウェルカー 2019）。これは文明論的に考察されるべき事象だろう。そしてこの次元において見れば、東アジアはすでに、受動的消費ではない表象体験を共有する空間となりつつある。つまりそこには**ハンナ・アーレントの言う「行為」**の場がある、もしくは潜在している。竹内好が魯迅やタゴールなどアジアの詩人たちに見出した西欧資本主義文明への「抵抗」の可能性、あるいは「文化的な巻き返し」、一九六一年の竹内においてはいまだ空虚なままに語られた**「方法としてのアジア」**（竹内 2006）という概念は、意想外にも、こうした「行為」の場面の積み重ねによって内容を充填されていくものであるのかも知れない。そのとき私たちは、西欧との鏡像関係において規定される「アジア」を抜け出すだろう。「行為」とは、現実界に衝き動かされ、象徴界に裏切られ、対象a構造を未研磨の原石のまま世界に露出することを余儀なくされた者たちが、互いの声の響きに魅かれて出会い、声と視線の交叉のさなかで魂の宝石（soul gem）を削り出そうとする営みにほかならない。和解学に取り組む者は、こうしたところに来るべき「対話」の準備状況が潜在していることを見るべきなのではないか。……表象は、あくまで「想像的解決」にすぎない。しかしその表出が招き寄せる他者との出会い、そこで始まる「対話」には、未来が懐胎されている。その未来を取り出すための、和解学の詩学に基づいたマイクロポリティクスの実践は、プログラムとして組み立て可能だろうか。教育という場でなら、可能であると言えそうだ。デリダの言う国家の生産性／再生産性（生殖による繁殖性）に捕らわれない**「散種」**の概念とは、こうした構想力（記憶と想像の力）の解放による出会いと未来の可能性を指すものではなかっただろうか（デリダ 2021）。それは美しい国民の記憶に代わり、**崇高でおぞましいもの＝アブジェクションが露呈する笑いの空間**（クリステヴァ 1999）、**享乐的パロールのポリフォニーが織りなすコーラの生成**である。こうした近代国家的な象徴秩序に包摂されない想像界の共振が、バトラーが主張する象徴秩序の書き換えという叛逆の物語を紡ぐのか（バトラー 2021）、あるいはこの論考で述べてきた二〇世紀国民国家体制の終焉というシステム側の変化の関数にすぎないのかは、実は、和解を主題とする限り問題とはならない。私たちは和解へ向かうにあたって、構造が先か主体が先かという永遠の問題を解く必要はない。和解という目的は、この論考が明らかにしてきた「想像界の倫理」によって達成することが可能である。

自験例：学部生卒論より

「BL消費の享樂—作者と読者の間に起こること—」

「分析家のディスクールにおいて分析主体は、分析家との転移関係を通じた分析作業の中で、自らの剰余享樂がどのように形成されているのかを知り、新たな主人のシニフィアンを発見する。BL愛好者は、BL愛好者のコミュニティに入り、先に述べたようにお気に入りの作者（対象a）を通してBLから自分がどのような享樂を得ているのか、自分のBLへの欲望はどのような欲望であるのか、つまり自分の剰余享樂がどのように形成されているのかを知る。そして、同時に自分の欲望が現実社会においておっぴらに認められるものではないことを知る。このことは金田2015で指摘されるように、二次創作BL愛好者が自らを「腐女子」と呼び、自分たちの行いを卑下することにも現れている。

但し最初に述べたように二次創作BL愛好者たちのこのような姿勢にも変化が見られる。「腐女子」と自称する自分たちの姿勢が「原作では当然異性愛者であるはずのキャラクターを勝手にホモにするヘンタイの私たち」というように現実社会のミソジニー、異性愛規範、ホモフォビアを内面化していることを指摘し、このような姿勢から抜け出そうという提言がSNS上で多く見られるようになった。これは分析家である作者との関係において新たな主人のシニフィアンが生産されたことによるといえる。

新たな主人のシニフィアンは、主体が新たな社会的紐帯を結び直すことを可能にする（松本2015:317）。つまり分析主体である読者はBL愛好者たちの欲望を目にし、自らの欲望を知るにあたり社会規範につき当たったが、作者の欲望を肯定するとともに自らの欲望を肯定し、多様な性的指向の承認という新たな社会規範、つまり新たな主人のシニフィアンとの出会いを経験したのである。」

自験例：学部生卒論より

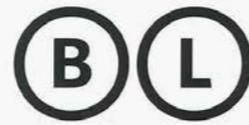
「BL消費の享樂—作者と読者の間に起こること—」

(二次創作の)
作者 → 読者
原作者 // 新しい
絆

中国からの留学生

BL 作品から見る中国と日本の女性における理想的な愛のパラダイムの相違について
— 「天官賜福」と「百と卅」の比較分析を例に —

中国からの留学生



が開く扉 ジェームズ・ウェルカー [編著]
変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー

SEXUALITY AND GENDER TRANSFIGURED IN ASIA

EDITED BY JAMES WELKER



BL OPENING DOORS

青土社

BL 作品から
的な愛
— 「天官賜福

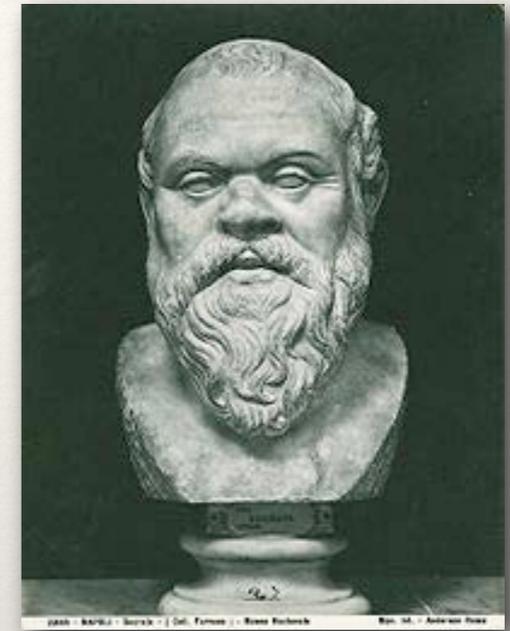
における理想
について
分析を例に—

哲学はいかに精神分析を必要とするか？

- ❖ 「哲学」がソクラテスの始原に立ち戻り、主体の変容と新しい社会的紐帯のための技法を現代にもたらすためのものとなるには、精神分析の遺産を必要とする。
- ❖ では、精神分析は哲学を必要とするか？「幻想を横断する」技法を分析者＝被分析者の二者関係から解除し般化するためには、必要か。

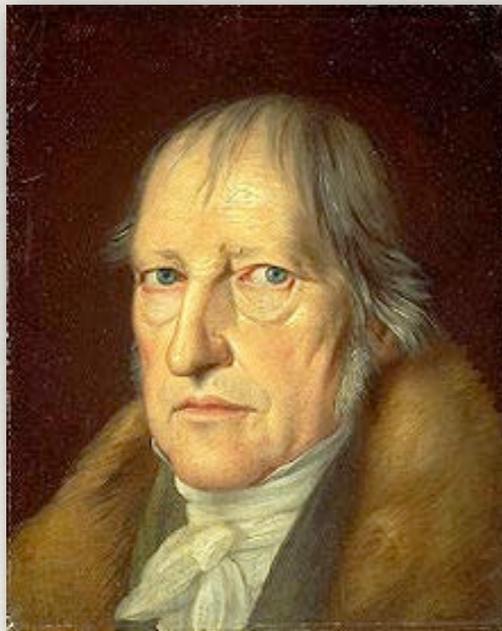
弁証法とは？

1. ソクラテスの「対話法」 (διαλεκτική)



Socrates
469 BC – 399 BC

伝統的 (形式的) 論理学



G.W.F. Hegel
1770-1831

2. ヘーゲルによる「弁証法」 (Dialektik)

「ヘーゲルと精神分析」シンポジウム

- ❖ 日本ヘーゲル学会第33回研究大会
- ❖ 2022年6月11日(土)・12日(日)
- ❖ ハイフレックス方式：創価大学（八王子） & Zoom
- ❖ 司会：野尻英一（大阪大学 准教授）
- ❖ シンポジスト：
 - 池松辰男（島根大学 講師）
 - 片岡一竹（早稲田大学文学研究科博士後期課程）
 - 小川歩人（国際共創大学院学位プログラム推進機構特任助教）
- ❖ 日本ヘーゲル学会ホームページ (<http://hegel.jp>)

参考

- ❖ 野尻英一（2017）「フレドリック・ジェイムソンにおける〈歴史〉と〈現実界〉の問題——批評から社会理論への助走『社会理論研究』第一八巻、四—二四頁。
- ❖ 野尻英一（2018）「未来の記憶——ヘーゲルの構想力と哲学の起源についての断章」、那須政玄／野尻英一共編『哲学の戦場』行人社所収。
- ❖ 野尻英一（未刊行）「記憶の器としての〈私〉、歴史の器としての〈国家〉を超えて——和解学のための詩学とマイクロポリティクスへ——」『アポリアとしての和解と正義——歴史・理論・構想（和解学叢書2）』梅森直之編、明石書店、2022年刊行予定。